

月刊

2012

12
月号

みんぱく

・〈特集〉・

大阪のなかの異文化



大阪の味は混交としたまったり味 奥村 彪生・綱・ちゅら・エイサー祭 金城 馨

ネオ関西西弁 真田 信治・私鉄王国の文化 久保 正敏

駅前の異空間アンダーグラウンド 菅瀬 晶子

去年関西を舞台にしたふたつの映画を見て、たいへん戸惑った。「阪急電車」では、関西弁のおばさん集団が、電車内で大声を上げて話しまくって、厚かましくも人の席まで奪ってしまう。また「プリンセス・トヨトミ」でも、関西弁のおばさん集団が、狭いエレベーターの中で、周りの客を省みず騒々しく話をやめない。見ていて、情けなくてならない。ここに面白げに描かれる女性たちは、近年「大阪のおばちゃん」と呼ばれる人たちである。

しかし、私は宝塚に住んでいつも阪急電車に乗り、大阪のエレベーターにも数限りなく乗っているが、こんな傍若無人で、下品な女性たちに一度も出くわしたことがない。こうした女性には現実には存在せず、「大阪のおばちゃん」の特徴とされるもの多くはフィクションなのである。大阪の女性たちは、たしかにおしゃべり好きかも知れないが、それは周りを楽しませるためなのであって、ちゃんと気配りをするから他人を不快に陥れることはない。

「大阪のおばちゃん」というフィクションは、どのように生まれたのか。おそらく大阪人を面白おかしく採りあげるテレビ番組たちが、誤ったイメージを伝えたのだろう。思えば、私たちの番組「探偵！ナイトス

プロフィール
滋賀県生まれ。京都大学法学部を卒業後、朝日放送入社。人気番組「探偵！ナイトスクープ」プロデューサー、大阪芸術大学教授。1991年放送の「全国アホ・バカ分布図の完成」編が日本民間放送連盟賞・テレビ娯楽部門最優秀賞、ギャラクシー賞選奨、ATP賞グランプリを受賞。主な著書に『全国アホ・バカ分布考——はるかなる言葉の旅路』（新潮文庫、1996年）など



「大阪のおばちゃん」というフィクション

まつもと おきむ
松本 修

クープ」もその当事者のひとりだったのである。

近年、「大阪のおばちゃん」は、豹柄の服を着ている、また、「あめちゃん」を道で出会った人にも分け与えてくれるなどと言われるが、これらは明らかに私たちが発信源である。

かつて「大阪のおばちゃん」は、豹柄の服が好きなのではないか？」という探偵依頼に応じて市内の商店街でロケをした。テレビの画面では、探偵は次から次へと豹柄のおばさんに遭遇し、スタジオは爆笑の渦となった。まるで大阪は豹柄のおばさんだらけのような錯覚をおこすビデオだが、実際は何時間もロケして出会った豹柄の女性数名を編集でつないだだけのことなのである。「あめちゃん」にしても同じで、これも膨大な数のおばさんたち取材して、「あめちゃん」をくれた数名のみを巧みに編集したものである。豹柄の女性も、「あめちゃん」をくれる女性も、実際にはほとんどいない。

あくまで楽しい「ネタ」として放送してきたものだが、いつの間にか「大阪のおばちゃん」の特徴として定着していった。映画のように世にマインナスのイメージで捉えられているとなると、ちゃんとした都会人たる大阪女性に対して、いささか申し訳ない気持ちになる。

月刊 みんぱく

12月号目次

- | | |
|--|---|
| <p>1 エッセイ 千字文
「大阪のおばちゃん」というフィクション
松本 修</p> <p>2 特集
大阪のなかの異文化</p> <p>3 大阪の味は混交としたまったり味
奥村 彪生</p> <p>4 綱・ちゆら・エイサー祭
——与那原大綱曳 in 大正区 金城 馨</p> <p>6 ネオ関西弁——「方言萌え」の流れのなかで
真田 信治</p> <p>7 私鉄王国の文化 久保 正敏</p> <p>8 駅前の異空間アンダーグラウンド
——わが街・新宿と大阪駅前ビル 菅瀬 晶子</p> <p>10 研究フォーラム
肉食行為の研究
野林 厚志</p> <p>12 みんぱく Information</p> | <p>14 地球ミュージアム紀行
研究所か博物館か
——サンクトペテルブルクの人類学民族学博物館
佐々木 史郎</p> <p>16 連載リレー 知の収蔵庫
CRPS とこんにちは! その1
脳の不思議
菊澤 律子</p> <p>18 多文化をあきなう
商品のバックグラウンドを想像する
和坂 友利江</p> <p>20 異聞逸聞
もうひとつの“親族”——チワン族の「ラオトン」
塚田 誠之</p> <p>21 みんぱく私の逸品
桂米之助アーカイブ
高橋 安司</p> <p>22 フィールドで考える
発掘は誰のため
松本 雄一</p> <p>24 次号予告・編集後記</p> |
|--|---|



大阪城天守閣から望む大阪ビジネスパーク。『日本三文オペラ』の舞台は、東洋最大の軍事工場「大阪砲兵工廠」を終戦前日に米軍機が徹底破壊した跡地だが、今や大阪ビジネスパークやJRの電車区に変身した(撮影・久保正敏)



1903年に開催された第5回内国勲業博覧会の跡地の西側は、「新世界」とよばれる繁華街となり、中心部にあったのがパリのエッフェル塔を模した通天閣。現在の通天閣は2代目で、おからのタワーブームに商機たくましく便乗中(撮影・庄司博史)

〈特集〉

大阪のなかの異文化

粉もん、お笑い、おばちゃん、大阪弁、阪神ファンなど、大阪文化を語るものは数々ある。しかし視点を変えれば、食べものにも言葉にも、住む場所にも、さまざまな出自をもつ文化や、それらと融合し、また派生した文化をみることができる。開高健『日本三文オペラ』に描かれているように、大阪は、多くの移住者とともに異文化を受け入れる、一種のユートピア的な包容力があつたのだろうか。新たな大阪文化の発見を通じて、みんぱく地元大阪から、異文化理解のヒントを見つけてみたい。



安くて有名な商店街のひとつ、千林商店街は野崎街道の一部であり昔から交通の要所(撮影・久保正敏)



東大阪の「石切さん」の名で親しまれる石切劔箭(いしきりつるぎや)神社。本殿前には百度石があり、老若男女が願をかける(写真提供・石切劔箭神社)



大阪ミナミの道頓堀川に架かる戒橋。2007年に架け替えられた。周辺には企業の巨大ネオン看板が掲げられ、新世界と並び、大阪を代表する風景としてよく取り上げられる

南海電鉄浜寺公園駅。南海電鉄も開発にかかわった浜寺公園や住宅地の玄関。辰野金吾(たつのきんご)設計のハーフティンバー様式の駅舎は、現役の明治建築として国の登録有形文化財である(撮影・久保正敏)



江戸時代には世界初の先物取引がおこなわれた堂島米会所があり、各藩の蔵屋敷が立ち並んでいた中之島周辺は、現在でもビジネス・センター

大阪の味は 混交としたまったり味

奥村 彪生 伝承料理研究家

大阪で進化した粉もん

大阪産と思っている食べ物のなかにルーツが他郷物は幾つもある。その代表はたこ焼とお好み焼だ。

大阪でたこ焼が生まれるのは昭和十年。それまで大阪の屋台で売られていたのが、ラジオ焼。えくぼの如く窪を入れた鋳物の鍋に小麦粉の溶き粉を流し入れ、みじん切りのキャベツやグリーンピース、ねぎ、紅しょうが、天かすを入れ、球体に焼き上げたものだった。

今里新地でラジオ焼を売っていた会津屋の初代が客から明石(兵庫県)ではゆでたこが入っている、と聞いて、ほな入れてみるかと始めたのが大阪のたこ焼の始まり。明石では玉子焼とよび、銅製のえくぼ鍋(江戸時代からあつた)で焼きだしをつけて食べる。生地は玉子と浮粉(小麦でんぷん)だ。



宗衛門町にあった一銭洋食屋のラジオ焼

会津屋は醤油味やが、会津屋を真似てたこ焼を始めた他の屋台では一銭洋食に使っていたウスターソースを塗った。大阪の生地はだしをしつかり効かす。ソースも今では大阪弁みたいにまったりとしたのをつけ、マヨネーズで厚化粧を施す。お好み焼かて他郷物。一銭洋食は戦前から大阪にあり、わたしも幼いころ買って食べたことがある。それを包んでいた新聞の匂いも一緒に味わった。お好み焼は戦後東京から伝わった。東京ではお座敷に鉄板をはめ込んだ食卓を置き、刻んだキャベツを加えた小麦粉の練り粉にトッピング用の食材を客の好みに合わせて組み、それを客が焼くシステムだった。お好み焼屋は上野や浅草界隈の下町で流行っていた大人の男女の待ち合の場になっていた。

これが戦後大阪に伝わり、大発展し、こてこての味へと進化した。けどだしがよう効いていて、東京より数段うまい。よそもんが大阪もんに戦後流行ったもんにホルモン煮やホルモン焼がある。これ戦前から生野区の生野川の改修のために来ていた朝鮮半島の労働者が食べていた。ホルモンとは牛の内臓を指すのだが、れっきとした医学用語で、内臓を食べると体に良いということとで、昭和十六年に難波にある北極星が商標登録をとっている。決して内臓は放る物やおへん。

現在はホルモンの看板はあまり見られず、焼肉屋に名を変えているが、これとても生野区生まれの異国料理なのである。その異国料理で世界的な名物料理になっているのがしゃぶしゃぶ。この料理は今から二〇〇〇年程前に中国の北京で生まれた涮羊肉。このころ、二番目に始めた(一番目は廃業)店が現在も北京にあり、筆者も食ったことがある。薄切りの羊肉を沸騰している湯でゆすいで食べる。まさに肉の洗濯。羊肉を牛肉に変更して、この鍋物を始めてはと京都の十二段屋にアイディアを持ちかけたのは中国から引き上げてきて



大阪市西成区玉出にある会津屋本店(撮影・久保正敏)



一銭洋食から進化したネギ焼



明石の玉子焼

いた鳥取県のお方。京都で評判になり、それを知った大阪のスエヒロが取り入れ、大阪で洗濯を表現する幼児言葉のしゃぶしゃぶを料理名として大当たりした。今や牛だけでなく、豚や鰻、鯛、水蛭まである。

他郷の産物を大阪産にした代表はなんと、いってしまえば塩昆布。北前船が盛んだったころ松前産（北海道産）の昆布は心齋橋に集められ、さまざまに加工されて大阪だけでなく、他郷へ販売された。その加工品のなかで今も根強い人気があるのは醤油でことごと煮た塩昆布。飯によさ合う。



1903年開業の東來順の涮羊肉。一人前の肉の多いこと



ホルモン焼と焼き肉



もみだれでもんだホルモン焼と焼き肉の材料

綱・ちゅら・エイサー祭

——与那原大綱曳 in 大正区

金城馨 関西沖縄文庫

沖縄第二のふるさと、大正区
大阪湾に面した大正区は紡績業、鉄鋼業、木材業をはじめ、近代日本の工業を支えた「働くものまち」であり、大正時代から、多くの沖縄出身者が生活の糧を求めて出稼ぎに訪れ、労働者として町の発展を支えてきた。沖縄出身者がこの地に住み始めて約100年。定住を決定してから80年。二世、三世、四世と世代を重ね、今では大正区



上下：区政80周年が、第38回エイサー祭りと大綱曳をつなげた「綱・ちゅら・エイサー祭」(2012年)

民の四分の一が沖縄にルーツをもつといわれている。区内には沖縄料理の店舗が並び、沖縄で家の守り神とされる獅子「シーサー」が玄関に据えられた民家も多く見られる。

与那原の大綱が海を渡った

今年は大正区の区政80周年、沖縄の本土復帰40年を迎えた。この節目の年に、わたしたちは大正区と沖縄の絆をあらためて結び直し、さらなる交流につなげようと、沖縄県与那原町から区内に「大綱曳」を招く準備を進めてきた。豊年祈願や無病息災、子孫繁栄を願う大綱曳では、町民自ら直径二メートル、長さ九〇メートル、重さ五トンもの巨大な綱を綱い、老若男女を問わず大勢の住民が力いっぱい曳き合う。この一世紀を振り返れば、互いの文化や言葉が異なるために、さまざまな摩擦もあったのも事実だ。しかしまた、そうした「違い」を見つめ、「溝」をも挟みながら、多様な住民がそれぞれの思いを込めて綱を曳き合う九月八日の本番では「ハイイや、ハイイや」のかけ声とともに、一万人もの人たちの熱気が会場にあふれ、与那原大綱曳はイベントではない祭りそのものを体感させてくれた。

多文化共生ではなく異和共生へ

綱の前では人は小さな存在でしかない。しかし心地よかったのだ。どうしてだろうか。個の集合としてあの巨大なエネルギーを創り出すよるこびが共有されたからかも知れない。違いが「対立」へのエネルギーをつくるのではなく、「対等」の関係のイメージをえがくことができる。違いが「カベ」によって維持され、カベとカベのあいだには「スキマ」が存在する。違いを認め合い共生するには、スキマのスペースが必要になる。

沖縄人でもなく、大阪(ナニワ)人でもない。沖縄人でもあり、また大阪人でもある。そんなスキマから生み出された「おきなわ+大阪(ナニワ)〓おきナニワん」という大正区のプロジェクト。そして大綱曳



上：千島公園グラウンドでおこなわれた第1回沖縄青年の祭り(1975年)
左下：立ち退きが始まった沖縄人の集住地域(クブングァー)(1975年頃)
右下：北恩加島の沖縄そば屋(1956年)

エイサー祭りがスキマを広げていく。
一九七五年九月におこなわれた第一回沖縄青年の祭り(エイサー祭り)では、二〇〇人の沖縄青年たちは沖縄の思いをパーランクーのたいこに響かせた。どこからか「恥さらし」という声が聞こえてきた。そのとき「恥さらし」ということばが時間のカタマリとなっていた。この音に重なった。いまそれを振り返れば、八〇年という時間を超え、大正区と沖縄という空間を超えて、スキマが開かれた瞬間だった。

ネオ関西弁 「方言萌え」の 流れのなかで

真田信治 奈良大学教授

各地で、談話の効果をねらった関西弁使用が目立つようになった。あるテレビ番組に、札幌の若者たちが発する「すっきゃねん」「なんでやねん」などの音声を大阪の若者に聞かせ、「なんかちゃやな」と言わせていたのがあった。

いずれにしても、いわばキャラクター表現としての関西弁がノンネイティブに広がりを見せている。関西弁的な表現を会話のなかにはさみこむことで、場を盛り上げたり語り臨場感を持たせたりするわけで、それはあくまで言語遊戯的な運用なのである。

キャラクター表現としての関西弁

ノンネイティブにとつての、このような関西弁使用は、あくまで「冗談」でやっているというところが相手にも理解されている、それが大前提なはずである。そしてその発信元は、吉本新喜劇を中心とするお笑い芸人たちのことばづかいにあるようだ。しかし、その芸人たちの用語、たとえば「あきまへんがな」「そやよつてに」「そうだったか」などの表現は、現在の関西中央部のネイティブのセンスからは遠くなってしまうものである。わたしは素の彼らとつきあう機会があるのだが、彼



あずまきよこ著『あずまんが大王 1年生』(小学館2009)より©あずまきよこ/小学館 ゲッサン

らが必ずしも関西中央部の出身者でないこともあり、上掲のような用語はあくまでも意識的なコスプレとしてのものだということを実感している。

ネイティブの関西弁

いわばグローバルに広がるキャラクター表現としての関西弁は、ネイティブ関西弁とは異なっている。関西弁は関西圏に暮らす人びとにとつて、日常生活になくはならない言語変種である。それは実際にはメディアをとおしての東京弁と互いに干渉しあったハイブリットな言語変種(「ネオ方言」)ではあるが、それは決して「ふざけ」などではありえない。ネイティブにとつて、それは普通のことばなのである(上掲の用語に対応させれば「あかんやん」「やから」「そやなん」など)。

ある関西人が仙台で講演をしたおりに、聴衆から、「先生は冗談がうまく、ふざけ心がありますね」と言われた由。本人は、「決してふざけているつもりなどはなく、ごくまじめに話していたのに」と憤慨していた。

私鉄王国の文化

久保正敏

民博文化資源研究センター

関西私鉄の南北差——官との間合ひ

私鉄の成立史には軌間(レール内側の間隔)がふかくかわる。明治新政府が採用した狭軌(二〇六七ミリメートル)官営鉄道(官鉄)の補完を目的に施行された、私設鉄道条例(一八八七年)と後身の私設鉄道法(一九〇〇年〜一九一九年)は、官鉄と同じ狭軌を原則と定めた。この法に拠って創業した初期の私鉄は、官鉄との貨物輸送連携を重視し、狭軌の蒸気鉄道として出発した。関西圏では、南海電鉄の前身、阪堺鉄道(一八八五年、難波―大和川を開業)や近鉄南大阪線のルーツ、河陽鉄道(一八九八年、柏原―古市を開業)等、大阪南部の私鉄が相当する。

他方、軌道条例(一八九〇年〜一九二二年)は、道路上に敷設する鉄道を対象とし、官鉄との連携は想定しないので軌間のしぼりはない。そこで、これに拠って創業した私鉄は、標準軌(一四三三ミリメートル)あるいは偏軌(二三七二ミリメートル)の電気鉄道として出発した。関西圏では、阪神電気鉄道、箕面有馬電気軌道(現・阪急宝塚線)、京阪電気鉄道、大阪電気軌道(大軌、現・近鉄奈良線)など大阪北部起点の私鉄は標準軌を採用し、かつ、軌道の一部が道路上にあれば良いとの拡大解釈が許されたため、路線のほとんどを専用軌道とした。そして、官鉄をライバル視し、官鉄のような長距離分散運転ではなく、頻繁運転で特急料金不要の都市間高速鉄道(インターアーバン)へと成長した。関西が後に私鉄王国とよばれるゆえんである。官鉄との連

携を良しとしない姿勢は、関西ならではの反権力、と見ることもできよう。官鉄との連携を重視してきた大阪南部私鉄との違いも面白いが、これは、沿線の地理・都市構造や物流形態の南北差ともかわるのだろう。

阪急が確立したビジネスモデル

当初、寺社仏閣や景勝地への参詣客・観光客をねらい、また沿線の集落を結んで曲線の多い線形で発足した私鉄だが、やがて、都市間を直線で結ぶインターアーバンへと脱皮していく。その好例は阪急電鉄である。

当初目指した有馬温泉到達を断念した箕面有馬電気軌道は、小林二三のアイデアで、沿線の需要を万遍なく創り出す工夫を重ねた。すなわち二〇世紀初頭イギリスの田園都市構想も参考にサラリーマン向けの健康な住宅開発を進めて朝夕の通勤需要を、断念した有馬に替わる遊園地、温泉、野球場を開発して休日の観光需要を、高速運転向きの神戸線開業にあわせて梅田にターミナルパートを設けて昼間の買い物需要を、学校を誘致して文教地区イメージを作り出すとともに通勤と逆方向の通学需要を、それぞれ開拓した。よく知られるように、以後これが私鉄経営のビジネスモデルとなる。さらに阪急は、宝塚歌劇や東宝という興行系事業にも進出した。

他の私鉄もさまざまな副業を進めたが、沿線に有力な観光地がある私鉄は遊園地など観光開発をまず進め、住宅地開発は遅かった。特に住宅に適さない低地での住宅地開発は遅れ、宅地単価も低めとなる。統計によれば、戦前期の宅地単価は概して阪急や京阪沿線が高く、南海や大軌沿線



大阪北部私鉄と南部私鉄の接点といえる近鉄橿原神宮前(かしはらじんぐうまえ)駅構内にある四線区間。内側二線が南大阪線・吉野線の狭軌、外側二線が橿原線の標準軌



京阪電鉄伏見稲荷駅。伏見稲荷大社の千本鳥居にちなみ柱は朱塗り



阪急電鉄武庫之荘駅北側。1937年開発の武庫之荘住宅地は阪神間モダニズムの一端を示す高級住宅地。その雰囲気伝える駅前ロータリー風景は今や希少

は低い。

かくて関西各私鉄は、沿線文化、ターミナル文化など独自のイメージを創り出し、それぞれにイメージ・リーダーとなる住宅地、遊園地、スポーツ施設などを擁するにいたる。もともと、自ずと各私鉄の醸すイメージは異なり、そこに地域の地理的環境に根ざす宅地価格と住民の社会階層との関連性を見る人文地理学者も多い。山の手と下町の対比さながらに、上品・高級イメージから親しみやすく庶民的イメージまで、各私鉄に冠せられたイメージは、現在にも引き継がれている。

こうしたイメージの点から、関西と関東の大手私鉄間の近似性がよく語られるが、わたしの勝手な見立てでは、南海⇨東武、阪神⇨京急、阪急⇨東急、京阪⇨京成、近鉄⇨西武というところか。

国鉄民営化とその後

運輸以外の付帯事業を禁じられていたため沿線開発ができたかった旧国鉄に比べ、不動産、流通、観光など本業外の事業収入を誇っていた私鉄だったが、これらは一九九〇年代以降のバブル崩壊、少子化と労働人口減少、という逆風のなかでかえって足枷となり、遊園地の廃業、プロ野球からの撤退も相次ぎ、イメージ・リーダーは色あせていく。

これに対し、一九八七年の民営化以降、JR西日本は、私鉄のお株を奪うアーバン・ネットワーク構想やさまざまな事業展開、さらには阪神淡路大震災からのいち早い復旧などで、優位に立った。今では、大阪北部の私鉄は速達競争から撤退し、特急も停車駅を増やして利便性にシフトしつつある。死語となりつつある私鉄王国だが、JRという巨大グローバル文化に抗しつつ、各私鉄独自のカウンターカルチャーを堅持して欲しい、とは一鉄道ファンからの願いである。



阪神電鉄武庫川駅。六甲山裾野のもっとも浜側を走る阪神電鉄には、ほかにも香櫛園(こうろえん)、芦屋、大石など川をまたぐ駅が多い

駅前の異空間 アンダーグラウンド わが街・新宿と 大阪駅前ビル

菅瀬 晶子 民博 民族社会研究部

都市と闇だまり

阪急電鉄梅田駅の改札を出て、長いエスカレーターに乗ると、いつも混雑を極めるコンコースに吐き出される。人波の流れるままに身を任せれば、たどりつく先は昼も夜もまばゆく輝く、廣大無辺の地下街だ。

東京は新宿育ちのわたしにとって、人波も明る



大阪駅前ビルは第1から第4ビルまであり、上層階はオフィス、地下部分は店舗が展開し、巨大な梅田の地下街とも通路で結ばれている。店舗は各種・新旧おりまぜられており、ビルがオープンした70~80年代当時の雰囲気も漂わせる純喫茶も点在する

すぎる照明も、慣れ親しんだ空気のようなものである。ところが進学とともに大阪に移り住み、はじめてこの場所に来たとき、強烈な違和感をおぼえてひどく緊張したことを、今でも鮮明におぼえている。じつは、いまだにじめない。あまりに整然と人工的すぎて、大阪に暮らす人びとの歴史が感じられず、息苦しくなってしまうのだ。

もちろん、京都や奈良のような街並みを、この場所に求めている訳ではない。大阪も東京同様、太平洋戦争末期の大空襲で焦土と化し、その景観は過去と切り離されてしまった。しかし東京の場合、繁華街には闇市の名残が今でも残り、戦後日本の歴史を強烈に街の景観のなかに刻みつけている。御徒町のアメヤ横丁、新橋、渋谷の道玄坂、いずれもかつて闇市があったところだ。そんななかでもっとも泥臭く、アナキーなエネルギーを発し続けているのが、新宿である。

もともと新宿は、江戸と外界をつなぐ宿場町として発展した場所である。宿場町の常として飯盛旅籠、戦後は赤線地帯もあつたのはいうまでもない。高度経済成長の時代、混沌とした闇市のパワーを受け継ぐように、新宿がアンダーグラウンド・



新宿の「思い出横丁」、通称「しょんべん横丁」には今宵もさまざまな人びとが集う。闇市の名残をもっとも濃厚にとどめる一角だ



夜の新宿西口



大阪駅前ビルは、大阪駅前の再開発のため大阪市により建設された。まわりは、のちに建設された外資系ホテルやショッピングモールなどに囲まれている

カルチャーの花開く場所となったのは、そうした歴史的背景ゆえといえるかもしれない。ゴールデン街や地下街、大ガードの闇だまりこそは、名だたる文学者たちや演劇人、映画監督、さらには新左翼活動家など、日本の戦後を担った人びとの巢。一九六八年と六九年、新左翼活動家らと機動隊が激突した新宿騒乱は、燃料輸送列車の事故が新宿駅で起こったことに起因するが、この地がアンダーグラウンドの都であるからこそ起こったことも事実であろう。そんな新宿のアンゲラ界を泳ぎまわっていた一人であり、先日惜しくも急逝した若松孝二監督の作品には、繰り返し新宿騒乱の映像が登場する。それを観るたびに、強く思うのだ。今も新宿には、あの騒乱の匂いが漂っている。わたしの記憶に残る、もっとも古い新宿の風景は騒乱から間もない七〇年代中葉のそれであるが、当時も今も、その匂いは変わってはいない。

大阪でみつけた「原風景」

新宿のコンコースや地下街、路地裏のそこそこ

に、今でも残る戦後の闇だまり。それを覗き見ながら、わたしはこの街の過去を知り、大人になったところが、新宿とほぼ同規模の大ターミナルであるにもかかわらず、梅田駅のコンコースにも地下街にも、アンゲラのかけらもない。縦横無尽に張り巡らされた通路はどれも同じにみえ、輝かしい照明の下を歩く若者たちは、大阪が空襲に焼かれたことすら、知らないのではないか。梅田に来るたびにそんな違和感を抱え、歩き疲れたある日、偶然迷い込んだ地下街のはずれに突然あらわれた空間に、わたしは眼を奪われた。

入り口に大阪駅前ビルと記されたそこは、カタカナ名のついたごきれいな地下街とはあきらかに一線を画していた。中古レコード店に古書店、金券ショップ、油じみた飲食店が並び、薄汚れた通路のあちこちに、秘密の匂いのする闇だまりがある。中古レコード店でブーツレグをあさりながら、わたしはすっかり、新宿にいるような心地よい気分浸っていた。その後、十三などとともにここがかつて大阪の闇市のひとつであったことを知って、やはりそうかと納得し、妙に安心したものだ。

近年、梅田・大阪駅周辺はさらなる再開発が進み、ますます人の息吹も個性も感じられない空間となりつつある。再開発の一環として、大阪駅前ビルを解体し、緑地化しようという計画も持ち上がっている。しかし、闇をあとかたもなく消してしまうことが、その街にとつてほんとうによいことなのだろうか。もっとも、アンゲラは日の当たらぬ存在だからこそ、アンゲラと呼ばれるもの。そこにわざわざ光を照射し、「文化」と称して保存してしまうのは、そぐわぬ気がするが……。



肉食行為の研究

のばやし あつし
野林 厚志
民博 研究戦略センター

動物を狩る、育てる、加工する、調理する、そして食べる。人間が動物の肉を口にする（あるいはしない）ためにおこなうことや、それに付随する価値、制度は、単なる食料の選択にとどまらず、じつに文化的なものである。

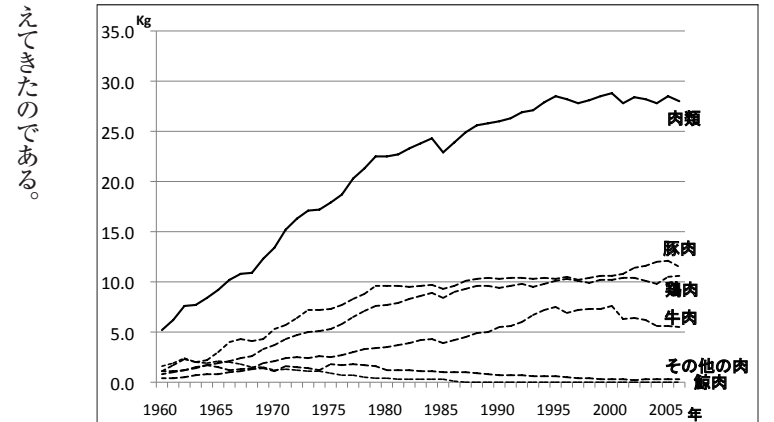
日本社会の食生活の変化

日本における食生活の様子をあらわす数字がある。農林水産省が公表している食料需給表に示された値である。

- (一) 九一・一キログラム
- (二) 五七・八キログラム
- (三) 三二・八キログラム
- (四) 二九・六キログラム
- (五) 二八・六キログラム

これらの数字は、米、小麦、野菜（イモ、豆類を除く）、食肉、魚介類の各食品の「一人当たり供給」の「二年当たり数量」（平成二三年度食料需給表にもとづく）の値である。どの値がどの食品に相当するかわかるだろうか。答えは、(一) 野菜、(二) 米、(三) 小麦、(四) 食肉、(五) 魚介類である。

昭和四三年度のこれらの食品の値は、野菜が二四・九キログラム、米が一三五キログラム、小麦が三二・三キログラム、魚介類が三二・四キログラムであり、食肉はじつに二キログラムという数字であった。「一人当たり供給」は実際の消費量とは異なるが、日本の食生活に提供される食肉が半世紀弱のあいだに三倍近くの量になってきたことがわかる。家庭の食卓にのぼる食肉が増えただけでなく、ファミリーレストランやファーストフードといった外食産業にも肉料理のメニューが必ず登場するように、家庭の内外で肉料理を食べる機会が増



国民1人・1年当たり供給純食料累年統計（農林水産省HPより作成）

えてきたのである。

先述の統計値から単純に理解できることは、日本では肉をよく食べるようになったということである。ただし、その増減には時代背景がある。やはり、農林水産省が発表している「国民一人・一年当たり供給純食料累年統計」から食肉の供給量の経年変化をグラフに示すとそのことがよくわかる。高度経済成長時代からバブル経済がはじけるまで肉食はおおむね増えている。牛肉については狂牛病の問題が顕在化した二〇〇〇年前後から供給量は減少している。日本

人に特徴的な消費の対象であった鯨肉については、一九六〇年代前半の供給量は食肉のなかでも第一位を占めていたが、その後は減少の一途をたどっていることがグラフからも読み取れる。もちろん、他の食品の供給量からも時代の様子はうかがえるが、肉食は時代ごとの人びとの生活の様子をよく映し出してくれる、いわば、人間くさい営みであるといってもよい。

肉食行為のもつ問題群

肉食のもつこうした側面に気づき、社会を読み解く鍵のひとつにしてきたのが人類学や民族学である。狩猟採集社会のみならず、農耕社会においても、食肉は生態学的にも栄養学的にも貴重な資源である。また儀礼

や祭礼といった場面でも大切な意味をもち、共食や分配といった行為をとおして社会関係が築かれることも少なくない。肉食にかかわるこうした行為に含まれる文化的・社会的意味が人類学者の関心をよせるところとなってきた所以である。今回、筆者が企画した共同研究も人類学の視点からの肉食行為の研究が出发点となっている。食肉の単なる消費だけでなく、狩猟や家畜飼養といった食肉の獲得のための行為から、分配、流通、実際の消費やその後の廃棄の過程にいたるまで、肉をめぐる人間のさまざまな行為を考えてみたいのである。

ところで、日本の食肉の供給量が増え始める一九六〇年代の前半にすでに、食肉の大量生産を目的とした近代的畜産への批判がイギリスで生まれ、その後、七〇年代にはいり、動物の権利をめぐる議論が、哲学者であるピーター・シンガーらを中心に本格的におこなわれるようになっていく。議論の内容は、肉食の是非や家畜動物の扱いにとどまらず、動物実験の是非やペットの扱い、闘鶏や競馬、動物園のような動物を使った人間の興味、バイオフィリア（本能的な自然への愛情）といった心理学の領域まで広がっていった。もともと、言い出

しつぺのシンガーが動物の解放は女性解放のパロディだと嘯いたように、原理原則に固執するあまり、「人間の家を食い尽くす

権利をシロアリがもつ世界」を主張する者さえも登場してしまうと、現実の社会のなかで考えるべき問題を見失いかねない。地域や国家の枠組をこえたグローバル消費社会では、肉食の社会的な位置づけはもとより、肉の定義が異なる文化的、社会的脈絡にあった者同士が共通の経済的枠組のなかで生活をする場面も当たり前になっていくだろう。制度化、規準化が強まるなかで、それぞれの価値観の違いが原因となる衝突は肉食行為には伴いやすい。

この共同研究では、現実の社会で慣行されてきた肉食行為とそれに伴う諸現象について人類学をはじめとするフィールド調査の知見を具体的に扱うことを出発点とし、それらを串刺しにする視点を、倫理学や心理学、経済学や獣医学といった肉食行為にかかわるグローバルな課題が表出している分野の研究者に求めていきたいと考えている。無批判に展開される動物擁護論とは異なる人間と動物とのあらたな関係論、そして、そこから人間社会のありかたそのものを考えようというのが、目下この研究会で目指す方向である。

共同研究
共同研究「肉食行為の研究」
代表：野林厚志
2012年10月～2015年3月



福建省姑田（グウティエヌ）の客家の町。その日の朝に解体された豚の肉が売られる

年末年始展示イベント「へび」

2013年の干支である「へび」をテーマに、みんなく所蔵の資料や写真を展示し、世界各地の「へび」にかかわる興味深い情報をご紹介します。展示場内の「へび」にかかわる資料の場所を示した「へびマップ」も会場でお配りします。年末年始の1日、世界の人びと「へび」のつながりを探ってみませんか？

◆関連イベント
●ギャラリートーク
日時 1月14日(月・祝)
①11時～11時30分
②14時30分～15時
解説 小林繁樹(国立民族学博物館 教授)
会場 本館展示場内ナビひろば
※申込不要、参加無料(当日無料観覧日)

◆ワークショップ
「カルタを作って」

参加者はへび展示場で解説を聞いた後、印象に残った展示物を選び、スケッチやコラージュをして、カルタを作ります。
日時 1月14日(月・祝)
①10時30分～12時30分(受付開始10時)
②14時～16時(受付開始13時30分)
集合場所 第3セミナー室
定員 16名

※要申込(先着順)、参加無料(当日無料観覧日)
申し込み・お問い合わせ先
情報企画課「へび」展ワークショップ担当
電話 06・6878・8532

◆みんなくウィークエンド・サロン
詳細は本誌24ページをご覧ください。
「やっぱりヨーロッパ——春のみんなくフォーラム2013」

多様な歴史・文化・信仰から生み出された生活様式、近代の産業化を可能にした労働の力、グローバリ化した現代の人の移動と文化の交流が生み出す創造力。ヨーロッパの魅力をおささげするイベントを通じて紹介します。

◆関連イベント
●ハンセマナー(全4回)
小麦とライ麦は世界の食文化の中で大切な穀物です。ヨーロッパでは多様な形態のパンとして広く利用されています。このパンとヨーロッパの文化との関係をフィンランド、ルーマニア、ドイツ、イタリアの専門家が語ります。

▼第1回 2013年1月26日(土)
「北欧のパン——ライ麦パンってどんな味？」
講師 庄司博史(国立民族学博物館 教授)、井上シルッカ(フィンランド料理アドバイザー)

北ヨーロッパからロシア北部にかけてのパンといえはライ麦パン。でも小麦の代わりにライ麦を使っただけではありません。作り方も味もちがうのです。セミナーではライ麦パンの

オーブンサンドをちよつと味見しながら、北欧のパン文化の世界をのぞいてみます。
▼第2回 2013年2月9日(土)
「東欧のパン——礼拝ではワインとともに」

講師 新免光比呂(国立民族学博物館 准教授)
パンは日常の糧であるばかりではなく、キリスト教の礼拝において大切な役割を持っています。そのときに重要なものがワインです。ワインを味わいながらパンの意味を考えてみましょう。
各回とも
時間 14時30分～16時(受付開始14時15分)
会場 国立民族学博物館 食堂(本館1階)
参加費 一人あたり500円
対象 中学生以上

定員 一回につき40名
※有料、要申込
※申込締切 2013年1月11日(金)
※2月23日(土)、3月9日(土)にもパンセミナーが開催されます。
※2月9日(土)のパンセミナーでは、ご希望の方(20歳以上)には、ワインをご用意いたします。当日は、お車でのご来館をお控えください。

◆みんなく映画会/みんなくワールドシネマ「少年と自転車」
今回は、ベルギー・フランス・イタリア合作の「少年と自転車」を上映します。親に捨てられ傷ついた少年が、信頼できる大人に出会い、心を開いて成長していく軌跡を、きめ細やかに描いた感動の物語。少年と里親の姿を通して、社会の支援と血のつながらない者どうしの絆を描きます。
日時 12月9日(日) 13時30分～16時(開場13時)
会場 講堂(先着450名)
※参加無料、申込不要
※当日10時から講堂入口にて整理券を配布

国際ワークショップ
「グロバル支援のための実践人類学」
——研究と実践のキャリア・プランニング——
日時 12月15日(土) 13時～17時
会場 第4セミナー室(定員80名)
※参加無料、要申込、日英同時通訳あり
お問い合わせ先
支援の人類学ワークショップ事務局
suzuki.o@dc.minpaku.ac.jp

●展示場新構築のお知らせ
本館展示場「日本の文化」展示のうち「祭り」と芸能」と「すまいとくらし」の一部が来年3月に新しく生まれ変わります。それに伴い、「日本の文化」展示全体が工事のため閉鎖されます。
閉鎖期間 2013年3月21日(木)まで
●休館日・無料観覧日のお知らせ
年末年始は12月28日(金)から1月4日(金)まで休館します。

※イベントや刊行物について、くわしくはホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は9時から17時(土日祝を除く)です。

刊行物紹介
■朝倉敏夫 編
『火と食』
ドメス出版 定価：2,625円
この本は味の素の文化フォーラム「火と食」(2011年度)をまとめたものです。火と人間、火と生活、火と調理という側面から火と食の関係を追究します。

みんなくフォーラム

会場 国立民族学博物館 講堂
時間 13時30分～15時(13時開場)
定員 450名(当日先着順)
参加費 無料(展示をご覧になる方は、観覧料が必要です)



樹皮舟を操る

二〇〇五年夏にロシア連邦ハバロフスク地方のアムール川下流域に暮らすナナイと呼ばれる先住民族の村で白樺樹皮舟の復元製作を行い、それを標本資料として本館に収蔵しました。その工程と技術そしてその背景となる彼らの白樺樹皮文化を紹介します。

第416回 1月19日(土)
「春のみんなくフォーラム2013」関連
ヨーロッパのキリスト教とファシズム
——ルーマニア・レジオナル運動を中心に——
講師 新免光比呂(国立民族学博物館 准教授)
深澤英隆(一橋大学 教授)

よく耳にするファシズムとはいったいどういったものなのでしょうか。そしてヨーロッパでは、キリスト教と関係があるのでしょうか。そんなことをルーマニアを中心にしてドイツ、イタリアの事情と比較して考えてみます。

友の会

友の会講演会(大阪)

会場 国立民族学博物館 第5セミナー室
定員 96名(当日先着順、会員登録必須)

第415回 1月5日(土) 14時～15時
時間の変わり目
クリスマスからイースターにかけての祝祭から
講師 宇田川妙子(国立民族学博物館 准教授)
ヨーロッパでは冬から春にかけてさまざまな祝祭があります。農閑期であるという事情もありますが、それ以上に新しい年を迎える、つまり時間の変わり目であるということと深く関わっています。複数の暦が錯綜するヨーロッパの事情もふまえ、「時間の区切り」について考えてみましょう。

第416回 2月2日(土) 14時～15時
みんなくコレクションを語る
明治と昭和初期の樺太資料の収集者たち
講師 齋藤玲子(国立民族学博物館 助教)

東京講演会(今回は横浜にて開催)
会場 JICA横浜会議室
定員 40名(要申込)
第104回 12月9日(日) 14時～15時
世界のバスケット/バスケットの世界
講師 陳天璽(国立民族学博物館 准教授)

※講演会終了後、海外移住資料館の見学もおこないます。
「やっぱりヨーロッパ——春のみんなくフォーラム2013」関連
親子ワークショップ「春よこい！」(要申込)
1. みんなで踊ろう！トランシルヴァニアの踊りと歌
会場・EXPO70パビリオン、参加無料
1月27日(日) 14時～15時半

2. ブルガリアのおまもり・マルテニッツァを作ろう！
会場・国立民族学博物館第3セミナー室、要材料費
2月24日(日) 14時～15時半
※内容や詳細は上記友の会までお尋ねください。

国立民族学博物館
ミュージアム・ショップ

電話 06-6876-3112
FAX 06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休

ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

ペルーのアルパカ人形たち

寒い季節になりました。今回はペルーからきたアルパカ純毛100パーセントのアルパカ人形をご紹介します。アルパカは南アメリカ大陸原産の家畜で、特にペルー、ボリビア北部、チリ北部の海拔およそ3500～5000メートルのアンデス湿潤高原地帯で放牧されています。その体毛はきわめて良質で、衣類をはじめとする生活用品として利用されています。アルパカの毛で作られたアルパカ人形は、ふわふわ、ももこと肌触りがよく冷えた体を温めてくれます。ご自分用はもちろん、またクリスマスプレゼントにもよろこばれると思います。



アルパカ人形 全6種類
小(高さ12cm)～特大(高さ55cm)
1,260～18,900円
アルパカストラップ 1,470円

価格はすべて税込

研究所か博物館か

―サンクトペテルブルクの人類学民族学博物館

佐々木 史郎

民博先端人類科学研究部



ロシアのサンクトペテルブルクにある人類学民族学博物館は、すでに一四〇年も研究所と博物館のあいだを揺れ続けてきた。本来、人類学・民族学にとって博物館と研究機関は表裏一体のもので、どちらかがかけても成り立たないはずなのだが。

宝物館から博物館へ

ロシアの古都サンクトペテルブルクにある人類学民族学博物館は、通称「クンストカメラ」とよばれるロシア最古の博物館である。正式名称は「ロシア科学アカデミーピョートル大帝記念人類学民族学博物館」という。ネヴァ川のほとり、有名なエルミタージュ美術館から川を挟んで斜め向かいにあり、中央に塔がそびえる緑色の建物が特徴的である。

当初はピョートル大帝の個人コレクションとして始まった。「クンストカメラ」というのはドイツ語で王侯貴族の宝物蔵を意味する「クンストカンマー」に由来する。建物は一七三四年に完成したが、一七四七年に焼失、再建された。再建とはいえ古都サンクトペテルブルクでも最古の歴史的建造物のひとつである。その両隣には動物学博物館と科学アカデミーの旧本部（帝政時代の本部）があり、近くには国立サンクトペテルブルク大学のキャンパスが広がる。この博物館の周辺はまさにロシアの学術研究の中心である。

クンストカメラは珍品宝物館だった関係で、当初は民族学資料に限らず、動植物標本や鉱物標本なども多数収蔵していた。しかし、その後各分野の研究の進展によって、動植物や鉱物の標本はそれぞれ別の博物館が創設されてそちらに移され、クンストカメラには民族学の標本と人類学解剖学の標本が残された。そして、両者を一括して保存管理し、ロシアにおける民族学と人類学の研究拠点とするために改組され、一八七八年暮れに「人類学民族学博物館」として生まれ変わった。

ロシア革命によって帝政が崩壊するまで、この博物館はロシアの民族学と人類学をリードした。しかし、一九三〇年代になるとスターリンの粛正の嵐に巻き込まれ、さらにそれに続く第二次世界

大戦で多くの研究者が前線やドイツ軍に包囲されたレニングラード（注：サンクトペテルブルクは一九一四年ベトログラード、一九二四年にレニングラードと改称され、一九九一年に住民投票により当初の名称に戻された）の町中で命を落としたために、この博物館の研究機能は大きく損なわれる。戦中の一九四三年に民族学研究所の立て直しが始まるが、それはモスクワが中心であり、この博物館はその後ソ連崩壊までソ連科学アカデミー民族学研究所レニングラード支部とされた。ソ連崩壊後の一九九二年にモスクワの研究から独立し、再び「人類学民族学博物館」としてロシア科学アカデミー直属の研究機関となり、現在に至っている。

民博に似ている？

この博物館の性格は民博と非常によく似ている。すなわち、世界をフィールドにした民族学、人類学の研究拠点としての機能をもつ研究所であると同時に大量の標本資料、映像音響資料を有する博物館でもある。この博物館の研究部門にはオーストラリア・オセアニア・インドネシア、アメリカ、アフリカ、東・東南アジア、東スラブ・ヨーロッパロシア、ヨーロッパ、コーカサス、シベリア、中央アジア、南・西アジアといった地域ごとの研究部とともに、人類学、考古学、博物館史、政治・社会人類学研究センター、『人類学フォーラム』誌編集部などの分野別の研究部がある。また、博物館のバックヤードともいえる博物館部門には出版部、展示部、展示案内・教育部、映像音響人類学実験室、保存修復実験室、資料管理部、図書館、古文書館、博物館警備部、情報技術部があり、研究、博物館両部門で一八九人（研究者は二〇人）の正規職員が働いている。

展示そのものは、古い展示ケースを使用し続け、リアルな石膏の人形に衣装を着せてポーズをとらせるなど、古色蒼然とした一〇〇年前の展示が継承されている。しかし、この本質主義的な展示も、展示資料が今や展示されている社会や民族にとって文化財級の貴重なものになっているために、逆に各文化の特徴を際立たせる働きをしている。これらの資料に収集当時の情報と現代における資料の意義を付加すれば、この展示のもつ研究と教育上の機能を大幅に向上させることができる。

現在、人間文化研究機構の研究事業として実施されている「日本関連在外資料調査研究」というプロジェクトの一環として民博が中心となり、クンストカメラが所蔵する日本資料の調査がおこなわれている。ここにはシーボルトをはじめとする江戸時代に長崎に来航したヨーロッパ人が収集した資料が収蔵、展示されており、この調査によってシーボルトコレクションの知られざる一面のみならず、今は忘れ去られている江戸時代の日本文化の一端も明らかにすることができる。それによってこの博物館の日本展示と日本研究がさらに充実したものとなることが望まれる。



日本展示の仏壇。下に見える位牌には「坪井博士之霊」と記されている



南アジア展示ホール



鉾を投げるアレウトの男性。北アメリカ展示より

アフリカ展示ホール



人類学民族学博物館（クンストカメラ）全景



脳の不思議

CRPSとこんにちは！ その1

CRPS(シー・アール・ピー・エス、複合性局所疼痛症候群)をひっさげて研究にいそむ筆者。痛みが自己のシステム内で増幅するという交感神経の病気で、その直接・間接の影響で日常生活でへんなことが起きたり、社会について考えさせられる場面多数。身体のこと、社会の仕組みと洋の東西、人の関係のありかたなど、CRPSと一緒に考えたのもろもろについてのダイジェスト版をお届けします。

実態のない痛み

アメリカの神経科学医ラマチャンドランによる著書『脳のなかの幽霊』では、脳に機能障害がおこったときにおこる人間の意識や世界の認識に関する具体例が多数紹介されている。自分の身体の片側が意識のなかで存在しなくなったり(半側空間無視)、身の周りにアニメの登場人物が「現実に」現れたり(チャールズ・ボネット症候群)、という事例は初めて聞く人も多いかと思うが、さて、幻肢痛——失われた手や足に感じられる疼痛——といえ、耳にしたことのある人も多いのではないだろうか。



例は初めて聞く人も多いかと思うが、さて、幻肢痛——失われた手や足に感じられる疼痛——といえ、耳にしたことのある人も多いのではないだろうか。

CRPSを患って五年になる。どんな病気かと聞かれると横着して、幻肢痛みたいなものだ、と答えることがある。物理的には悪くない場所に恒常的に痛みがある。実態

る。たとえば、脳の防御機能、というのはどうだろう。症状が強く、まだ痛みがほとんど制御できていなかった頃、わたしの脳は、映画『ブレードランナー』のレプリカントのように過去の記憶を作りはじめてしまった。

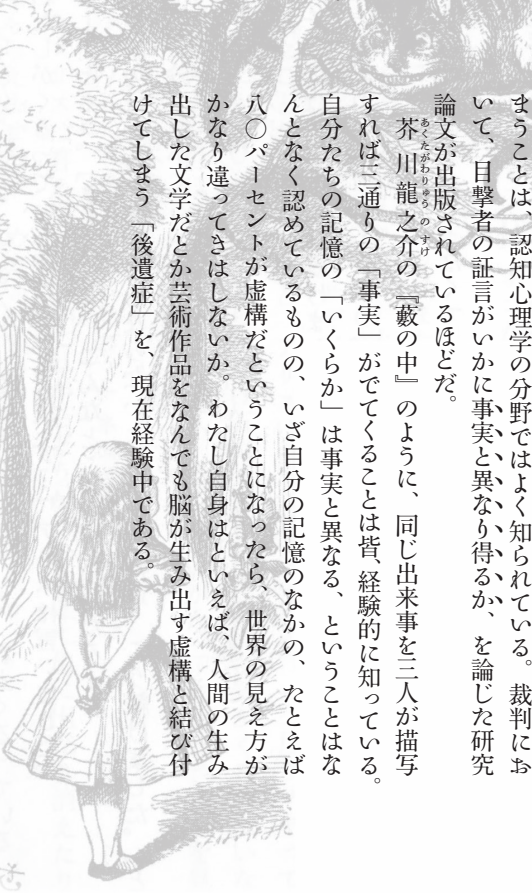
記憶を創り出す脳

「すみませんが、そろそろお金を返していただけないでしょうか」ある日、同僚のIさんがやってきて、遠慮がちにきりだした。といっても借金の話ではない。講演で回覧するための資料としてマダガスカルのお金を借りていたのだが、終わってからずいぶん経つ。「お返ししたと思うけど？ 手がつかえないからフォルダーに入ったままでごめんねって、わたしの研究室にとりにきてもらって。A5サイズの黒い表紙のクリアファイルに入っているはずなんですけど」。大切な借り物のお金をなくさないように、かつ、講演のときに見せやすいようにと、一枚一枚分けてフォルダーに収めてもらった。両手が思うように使えなかった当時、自分でそれをもとにもどすことは不可能で、心苦しく思いながらもそのまま受け取ってもらった記憶は、

周りの人たちに手をかりながらも、できることにはなんでも挑戦する。ハワイのマウイ島で見つけた大きなアメリカ・サトイモの下で (2012年3月)



昨日のことのように鮮明だ。ところが、念のためにと引き出しを開けて驚愕した。お金(のフォルダー)がそのまま入っているではないか。即、平謝りに謝って返したことは言うまでもない。いわれてみれば確かに、それまで「やったはず？」現象が頻発していた……。



2008年3月、発病して半年後の筆者。CRPSという診断がつくのは、もう少しあとになってから(松江にて)

菊澤 律子 民博民族文化研究部

がないのに感覚だけが存在する点で『不思議の国のアリス』の「猫のいないニタニタ笑い」を彷彿とさせるが、これは現実。表面は全体に針で刺されるような痛み、内側からはまるで筋肉を焼かれ、えぐられるような耐え難い痛みが続くにもかかわらず、レントゲンをとると、血液検査をしても何も悪いものは出てこない。神経系(脳を含む)内で生成された、ある意味「抽象的な」痛みの存在に苦しむ、という点で幻肢痛と共通している。痛みの信号を増幅させている直接の犯人は過剰に興奮した交感神経で、これを落ち着かせるのが治療方針だ。炎症を治めるのが目的の、いわゆる「痛み止め」は効果がない。なんとも奇妙な病気である。

医学的な解説や機序に関する説明は、このインターネット時代、わざわざここに記すことはしない。話題にしたいのはむしろ、医学記事にはあがってこない患者の目からみた日常のできごとである。だが痛みが占拠されている脳とでは、一日にこなせる仕事の量は限られている。発病してからも仕事を(どうか)続けていたわたしは、普通の状態なら、長くなりつづける「終わっていない仕事」のリストを反芻し続けて気がへん(変)になってしまったことだろう。必要な仕事を忘れること、忘れるわけにはいかないものには具体的なイメージを付けて「したことにする」ことは、脳の防御機能だったとしか思えない。……結果としてわたしが「しなかった」仕事の顛末については、同僚のみぞ知る。今となっては心のなかで手を合わせて頭を下げるしかない。

「記憶のギャップを埋める」という操作は、認知症でも知られている。記憶の断片が失われた結果、残った情報のあいだでつじつまが合わなくなると、脳が抜けている部分を自分なりに生成して全体を再構築する。再構築された話は当然、事実と異なることも多く、本人の頭のなかでは整合性がとれている話の多くが、周りから見ると「嘘」になる。わたしもあのころはたくさん、「嘘」をついていたのかもしれない。もっとも、病气や認知症を持ちだすまでもなく、人間の記憶が、それに続く経験に影響を受けてどんどん変化するだけでなく、実在しない「事実」まで創り出してしまふことは、認知心理学の分野ではよく知られている。裁判において、目撃者の証言がいかに事実と異なり得るか、を論じた研究論文が出版されているほどだ。

芥川龍之介の『藪の中』のように、同じ出来事を三人が描写すれば三通りの「事実」がでてくることは皆経験的に知っている。自分たちの記憶の「いくらか」は事実と異なる、ということはないとなく認めているもの、いざ自分の記憶のなかの、たとえば八〇パーセントが虚構だということになったら、世界の見え方がかなり違ってさはないか。わたし自身はといえば、人間の生み出した文学だとか芸術作品をなんでも脳が生み出す虚構と結び付けてしまふ「後遺症」を、現在経験中である。

商品のバックグラウンドを 想像する

和坂友利江

大阪市立大学 CHOVORA!! 代表

生産者は生産者の、消費者には消費者の「物語」がある。消費者が商品づくりの一部に加わることで両者の「物語」が交錯するとき、従来の消費活動を越えられる。フェアトレードは、その可能性を秘めている。

CHOVORA!!でフェアトレード

買い物をするためにモノを選ぶとき、人は何を基準にするのだろうか。値段、品質、デザイン、有用性、流行り……さまざまな基準がわたしたちの選ぶという行動に作用しているわけだが、その基準に、商品のバックグラウンドを加えてみるのはどうだろうか。わたしがサークル活動をおして広めているフェアトレードとは、その商品を作った人びと、いわゆる商品の裏側にいる人びとの暮らしを応援する取り組みである。

わたしは大阪市立大学のCHOVORA!!というサークルに所属している。CHOVORA!!とは「ちょっとしたボランティア」の略で、環境保護と国際協力の推進を目的に、ボランティア活動に仲間と一緒に参加したり、イベントをおした啓発活動をおこなっている。サークルのなかにはさまざまな活動をおこなういくつかのチームにわかれており、わたしはフェアトレードチームの一員だ。ここでは、フェ

アトレードチームの活動のひとつである、まちチョコプロジェクトを紹介するとともに、わたしのフェアトレードに対する考えを述べたい。

まちチョコプロジェクト

まちチョコプロジェクトとは、フェアトレード商品のひとつであるチョコレートのパッケージデザインを大学周辺地域の人びとから募集し、できあがったオリジナルパッケージのチョコレートを今度は大学周辺のカフェなどで販売してもらう取り組みである。全国の大学にあるフェアトレード団体がこのプロジェクトをおこなっている。わたしたちは昨年からのプロジェクトに取り組んでいる。

きっかけは、CHOVORA!!と地域の人びとの交流を利用して、フェアトレードをもっと多くの人に知ってもらえるかもしれないと思ったからである。まちチョコプロジェクトを毎年おこなうことに白そうなことは人の関心を引き、人と人とのつながりの力をおして自然と広まっていく。それが「フェアトレード」であるためにわたしたちは活動を続けていきたい。強制することなく、これを広めていけたら素敵だと思う。今年も八月から九月にかけて九店舗と小学校二校でパッケージデザインを募集し、一月より大学がある住吉区のカフェなど計六店舗でオリジナルチョコレートを販売する。

発想の転換

フェアトレードには課題もある。日本ではまだまだ認知度が低く、フェアトレードの恩恵を受けている生産者は一握りにすぎない。それでもわたしはこれとかかわっていきたいと思うし、広めていくべきだと思う。フェアトレード商品が他と違うのは、生産者のことを考えているところだ。今までそれほどクローズアップされてこなかった、生産者という人びとが今こうして注目されてきている。わたしたちは、目の前にある商品が誰かの努力の結晶であるということをお忘れがちである。フェアトレードを理解しるとか、商品を買うべきだということではない。安さの裏には誰かの苦悩が潜むことを想像する。これを作ってくれた人は幸せに暮らしているのかなと想像する。少し想像してみるだけでモノの見方はガラッと変わる。そんな、商品のバックグラウンドを想像することの意義をフェアトレードは伝えてくれている気がする。いつかフェアトレード商品というモノが、人びとにとって当たり前前の選択肢のひとつになればいいと思う。

よって、このチョコレートが地域の人びとに愛されるチョコレートになり、それによってフェアトレードも徐々に日常に浸透していけばいいというのが、わたしのまちチョコプロジェクトにかけられる願いである。昨年度は苦悩の連続だった。すんなりいくと思っていた交渉もなかなかうまくいかなかった。フェアトレードのどの部分をおしていけばいいのか、お客さんにこのプロジェクトをなんて伝えたいのか、お客さんの募集用紙でデザインが果たして集まるのか……など各店舗とのやり取りのなかでたくさん疑問が浮上した。それによって、自分たちの計画の詰めめ甘さを痛感するとともに、もっと自分たちもフェアトレードについて深く学ぶ必要があると思った。でもこうして厳しくも温かい地域の人びとのおかげで、今年もこのプロジェクトをおこなうことができているし、昨年の反省点を今年ではできるだけ改善していきたいと思っている。

二年目に突入した今思うことは、地域の人びとの存在や地域の人同士のつながりの力というのはとても大きいということである。カフェの店長さんが「いろんな人に声かけとくね」と言ってくれたり、まったく面識のなかったお店の方が「うちの店にも置きたい」と連絡をくれたり。ただ大学内で活動するだけではかかわることのなかった人たちとこのプロジェクトをおしてつながり、そのことによってフェアトレードがいつの間にか広がっていく。そう思えば、わたしたちが目指している「フェアトレードを広める」ことは、目標というよりは結果であればいい商品そのものが気に入れば、フェアトレード商品であるろうとなかろうとそれを買いたくなるように、面



ゴミ拾い活動 (CHOVORA!!の活動の一環)

集まったパッケージデザイン (一部)



昨年度のまちチョコパッケージ



カフェで販売しました



地域の子どもたちにチョコのパッケージを描いてもらう

もうひとつの“親族” ——チワン族の「ラオトン」

塚田 誠之 つかだ せいし 民博 民族文化研究部

ラオトンとはなにか

この数年、わたしは中国南部、広西壮（チワン）族自治
区のベトナムとの国境地域で、国境のチワン族が構築する
ネットワークについて調査をおこなっている。わたしが注目
したのが「ラオトン」という存在である。そ

れは、血縁関係にはないが、一般的な友人
よりも親しく、家族の一員に近いもので、い
わば義兄弟、擬制的な親族といつてよい。
年齢はほぼ同じくらいである。若いときに
知り合って、一生つきあいが続く。たがいの
家の祝い事や葬式に出席する。平常時にも
訪問しあう。国境を越えてベトナム人とラ
オトンになることも少なくない。距離の離
れた異なる村であることが多い。現在、ラ
オトン関係にある人びとはほぼ六〇歳以上
である。中国では若者の多くは、沿海部に
出稼ぎへ行って、現地にはほとんどいない。
そのこともあって調査は難航したが、粘り
強く調査を続けるうちに、予想以上の良質
のデータがえられた。

じつの家族同様の待遇

祝い事に参列する場合、相応の礼物を持
参する。ある人がラオトンの父の長寿祝いに参加したとき、
子豚の丸焼き一頭を贈った。これはじつの息子が贈るものと
同じものである。祝いの儀礼のとき座る位置は一目のラオ
トンの隣に設けられた。また、ある人はラオトンの父の葬



中越国境の村。国境地域に暮らす人びと

式の際に、ラオトンと一緒に喪装（白布を頭に巻く）をして、
棺の前方に立って埋葬地まで歩いた。このようにラオトンは
実子同様の待遇を受ける。このことは呼称にもあらわれて
おり、ラオトンの父母を相手側は「父母」とよぶ。ラオトン
の子ども同士は「兄弟姉妹」とよぶあう。

国境をも越えるもうひとつの「親族」

ラオトン関係を結ぶには、相手と意
気が投合することが必須である。ただ
し、たがいに助け合うことなど一種の
見返りを求める人も少なくない。国境
地域は人びとの流動が激しく、政治的
にも不安定な状況にあった。そうした
なかでチワン族の人びとは生活の安定
を求めて、地縁・血縁の関係を強める
とともに横のつながりをも求めてきた。
ラオトンは人びとの生存戦略の一環とし
て生まれ継承されてきたのである。中
国人が日本人よりも多方面に人間関係
のネットワークを結ぶことはよく知ら
れている。しかしラオトンのように国
境を越えて結ばれる関係についてはほ
とんど知られていない。隣国の人びと
の文化的特質について理解を深めることは意味のあることだ
ある。とともに、中国人とは環境や考え方が異なるものの、
日本でも社会において横のつながりを生かすことは人生をよ
り充実させるよう思われる。

みまぼく 私の逸品 桂米之助アーカイブ

受入年 2000年

民博情報サーブイス課

高橋安司

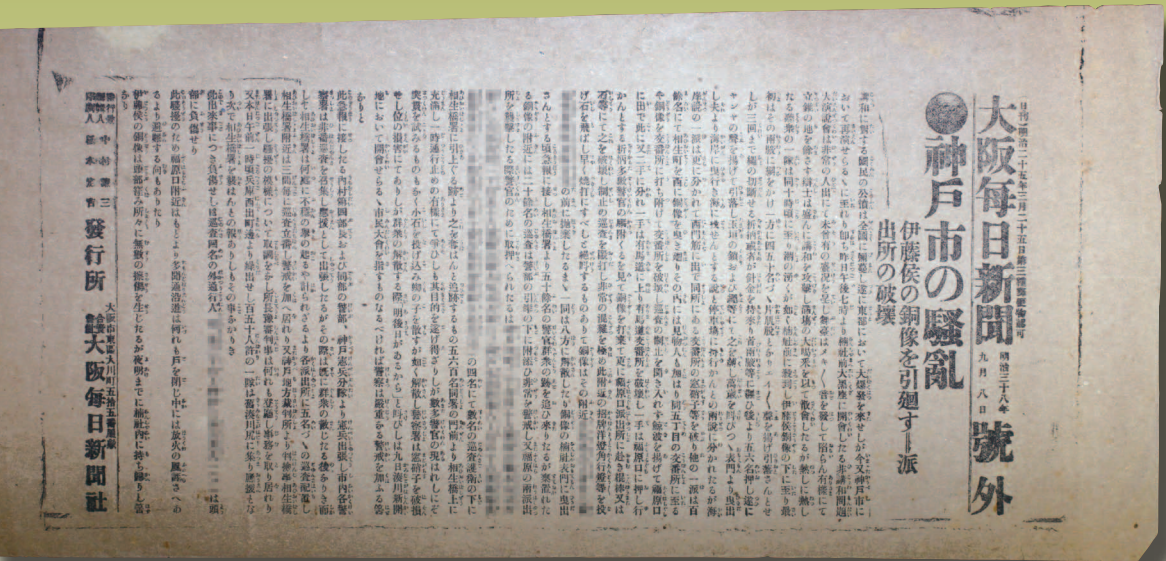
大阪市交通局に勤務しつつ落語家としても活動していたと聞き、変わった人がいたものだと思っていたが、五代目桂（かつか）文枝（ぶんえだ）も同じ交通局に勤務、人間国宝桂米朝（かみちあさ）も、民間会社や郵便局に勤務していた時期があるらしい。落語では食べていけなかった、そんな時代だったのかと思うが、定年まで勤めていたのはこの三代目米之助（よねのすけ）だけである。ある意味凄い人。

生まれは一九二八年、大阪の今里。当時は映画館や寄席が多くあり、父親も映画館主。となると、そういった資料を収集し始めたのも頷ける（うなず）か。ただ、大阪郷土史に関する知識も豊富で、雑誌やラジオ番組で大阪庶民史を紹介していたそうだから、只者（ただもの）ではない。

一九九九年に亡くなった後、遺品として残された資料は膨大で多岐に渡り、それらのうち落語関係の書籍や落語会プログラムは、大阪府立上方演芸資料館「ワツハ上方」に、落語に関する一次資料は関係者に、それぞれ引き取られることとなった。そして、落語と直接はかかわらない資料群は、彼がファンだった民博に寄贈したいとのご遺族の希望に沿って、当館の所蔵資料となり今日に至っている。

さて、ここで紹介するのは、桂米之助が収集した明治期の新聞の号外である。東京では収集から漏れがちな大阪の号外は、メディア史研究にとって貴重なもの。他にも、新聞付録、証券や引札など、興味深い資料がある。

余談だが、ワツハ上方からは、鉄砲節河内音頭宗家・鉄砲（てっぽう）光三郎（みつさぶろう）の太鼓をお借りして、音楽展示場に展示してある。使い込まれた太鼓は何を語るか、ご覧あれ。



資料番号 523

日露戦争後に結ばれた、ポーツマス講和条約が日本に不利であると、講和反対の暴動が各地で起きた。1905年9月5日の日比谷焼打事件が有名だが、翌々日に神戸でも暴動が起きたことを、この1905年9月8日付大阪毎日新聞の号外は伝えている。

※文中、個人名と住所の部分にぼかし処理をかけています。



「桂米之助アーカイブ」は、落語家3代目桂米之助氏旧蔵の資料である。アーカイブは、日露戦争の戦況を報道する新聞号外を中心に明治・大正期の在阪新聞の号外・付録等約900点と、米穀商関係資料などから構成されている。

発掘は誰のため

まつもと ゆういち
松本 雄一
民博 機関研究員

ペルー高地の神殿

二〇〇五年七月、ペルー中央高地に位置するアヤクーチョ県に、形成期（紀元前三〇〇〇―一五〇年）の巨大な神殿があるという情報をえたわたしは、バスを乗り継いでビルカスワマンという町へと向かった。カンパナユック・ルミという名のその遺跡は、町のすぐそばにあり、この一帯の同時代の神殿としては最大規模のものであると容易に想像がついた。当時大学院生で博士論文を書くためのフィールドを探していたわたしは、誰も調査したことのない無名の神殿が存在していることに興奮し、発掘調査をおこなうことを決意したのである。その時には、高地の抜けるような青空とインカ帝国時代の石積みがそこかしこにみられる美しい景観にもすっかり魅了されてしまっていた。

対立する行政と地域社会

二〇〇七年一〇月、何とか研究費を獲得しペルー文化庁から調査許可をえたわたしは、この大神殿を乏しい予算でどのように発掘するの書類を指さしながら「国の法律はここでは関係ない。国は共同体に対して何の権利ももっていない。外の人間は信用できない。ここで何かをするなら我々の要求を呑んでもらう」と宣言した。さらに続いて共同体を賛美しその国家行政からの独立性を主張する演説が始まり、わたしが何かを言える雰囲気ではなくなってしまった。幸い地元出身の学生が調査助手として参加しており、彼のとりなしで村人は引き上げてくれた。このとき、わたし自身はどう振舞うべきであったのか今でも考えることがある。



発掘調査は学生と村人との共同作業である



ペルー高地に位置するビルカスワマンの町

地域の過去と遺跡の発掘

結局のところ、頻繁に発掘成果の説明会をおこない、近隣の学校からの見学を積極的に受け入れることで、ある程度地域の理解をえることができた。また、その過程で共同体の人びとがなぜ文化庁の書類に激しい反応を示し、我々の調査に厳しい目を向けていたのかもわかるようになってきたのである。ビルカスワマンは八〇年代のテロリズムの被害をもっとも強く受けた地域のひとつであった。多くの悲劇が起こり、その影響は今なお消えてはいない。例えば、この時期に男の働き手を失った家族が共同体のなかに数多く存在し



町役場で調査の説明会を開く

ている。我々の調査が不平等だと非難された理由のひとつは、発掘作業員として男性しか雇わなかった点であった。むしろ男の働き手を失った家庭にこそ仕事が必要だったのである。

テロリストと軍の衝突がもっとも激しかった八〇年代後半、この地域の人びとは軍とテロリストの双方から疑われ、激しい暴力にさらされたという。その結果ビルカスワマンの共同体の多くは外部の人間をまったく信用しなくなってしまう。そんななか初めて外国人が入って調査をおこなう、しかも国の文化庁が許可したとなれば反発は必然であった。

考古学調査と現代社会

このような経験を通じて、「考古学調査は研究者だけのものではない」という当然のことを改めて考えさせられた。学術調査においても、必然的に学問の枠を超えた多くの人びとがかかわることとなるため、地域の政治状況と無縁ではいられない。我々外国人研究者は当然ながらペルーの法律にしたがって調査をしなければならぬが、それが原因で地域社会からの反発をうける場合があるのも事実である。一方で考古学調査は、国と地域双方の協力がなくては絶対に成り立たない。両者のあいだで研究者はどのように行動するべきか、今後とも逃げずに考え続けなければならないだろう。

12月

みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

■展示観覧料が必要です。
※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんなく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」など、話題や内容は実に多彩。どんでん質問をおよせください。展示場でお待ちしております。

2日
(日曜日)

時間 : 14:30 ~ 15:30
話者 : 横山廣子 (国立民族学博物館 准教授)
話題 : 黄土文明と現代中国
——山西省介休市で展開する観光開発
会場 : 本館展示場内ナビひろば

9日
(日曜日)

時間 : 11:00 ~ 12:00
話者 : 寺田吉孝 (国立民族学博物館 教授)
話題 : グローバル化するインド舞踊
会場 : 本館展示場内ナビひろば

16日
(日曜日)

時間 : 14:30 ~ 15:30
話者 : 園田直子 (国立民族学博物館 教授)
話題 : 資料の公開・活用のためのひとくふう
会場 : 東南アジア休憩所

23日
(日曜日)

時間 : 14:30 ~ 15:30
話者 : 小林繁樹 (国立民族学博物館 教授)
話題 : 年末年始展示イベント「へび」と教職員研修会
会場 : 本館展示場内ナビひろば

1年間みんなくに何度でも入館できる 「みんなくフリーパス(3,000円)」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんなくを楽しむための特典がいっぱいあります。

- 特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引
 - ◆みんなくミュージアム・ショップとレストランの10%割引
 - ◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引 など。
- 詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
(電話06-6877-8893 / 平日9:00 ~ 17:00)

編集後記

今月の『月刊みんなく』大阪特集号では巻頭の千字文で、松本修氏がマスコミの流布した大阪イメージについて書いておられる。編集子もそれに関しては日頃からまったく同感で、溜飲がさがる思いで読んだ。わたし自身大阪生まれで、人生の大半を大阪で過ごし、生粋の大阪人だともっている。しかし、一般にいわれるように阪神ファンでもなく、お好み焼きやたこ焼きは食べない。「よしもと」の芸風やわがもの顔のノリはこのまず、大阪弁ですごんだりもほとんどしない。そんな十把一絡げの大阪人像への反感もあって、他所では大阪イメージをふりまかないように言動には極力注意している。それなのに、あつけなく見破られ、おまけに典型的な大阪人などといわれてしまうのだ。そのたび、はからずも身に染みこんでしまった大阪文化の濃さとしつこさを実感させられている。ちょっとやさそつと表面をこすったところで剥がせるものではないらしい大阪人の本質とは何だろう。(庄司博史)

2012年11月号「フィールドで考える」(p22-23) の内容に誤りがありました。下記の通り訂正いたします。
p22 1段目後ろから7行目 笹崎鹿踊りは、太鼓踊り系に分類される

●表紙: 桂米之助アーカイブ 資料番号 904
暦付き引札 (明治 42 年)、國分屋 田尾商店。

次号の予告

特集 巳・へび(仮)

月刊みんなく 2012年12月号
第36巻第12号通巻第423号 2012年12月1日発行

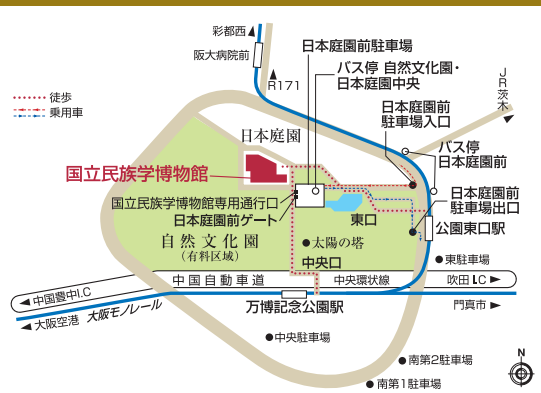
編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話 06-6876-2151

発行人 八杉桂穂
編集委員 庄司博史 (編集長) 小川さやか 櫻永真佐夫
久保正敏 菅瀬晶子 山中由里子
編集アドバイザー 山内直樹
デザイン 宮谷一孝
制作・協力 財団法人 千里文化財団
印刷 日本写真印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係に
お願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分 (茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください。)
- 自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料) から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。



みんなくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

